可児町柿下古窯発掘調査報告書

可 児 町 教 育 委 員 会

序

可児町には数多くの埋蔵文化財があります。縄文・弥生時代の遺跡や古墳、平安灰釉陶，山茶碗，志野，織部，黄瀬戸などの桃山陶，そして磁器といった古窯跡，種類も数も豊富で歴史的にも文化的にも貴重なものばかりであります。

ここ数年来可児町内到る処で道路建設，工業団地，住宅団地造成の為の土地開発が進み，埋蔵文化財保護が後手にまわっている現状です。ところが最近になって，地元の郷土研究家や一般住民のご協力により，関係機関の間で情報交換が行なわれるようになってまいりました。このようにして開発前に保護の手を打つことが出来るようになったことは，文化財保護行政にたずさわる者にとってまことに喜ばしいことであります。

今回の柿下古窯は，開発面積約100万坪という可児町内で最大規模の住宅団地の造成中に偶然発見されたとこであります。そこで開発事業者不二企業株式会社と協議した結果，現状保存は不可能で記録保存のための緊急発掘調査となったのであります。

岐阜県教育委員会文化課のご指導のもとに，岐阜県考古学会員中島勝国氏を主任調査員にお願いして調査を実施いたしました。その調査内容は本報告書のとおりですが，窯跡の規模が極めて大きいことにおどろきました。当時の人々がこの大きな窯で陶器の製作にたずさわる活気に満ちた姿や，大変な苦労を重ねて仕上げに向って活動しているようすを思い浮べることができます。窯焚きを始めると火を絶やさないように何昼夜も焚き続け寝食も忘れて働いたことであろう。そしてやき上った作品を窯から出すときの気持ちは，期待と不安が入り混じって複雑なものであったのではなかろうか？おそらく共同作業による仕事が多かったと思われるが，そこには自由な雰囲気と同時に厳しい仕事への態度がこの窯跡から肉迫してまいります。このような古窯の前に立ったとき改めて文化財のもつ意味がわかってくるような気がいたします。

可児町内にはこれと同じような種類の窯跡が数多く散在していますが，その一基一基に製作に従事した人々の個性と苦労が刻み込まれて，長い年月を経て現在に至っております。土地開発という人為的な行為から偶然にも堀り起こされることになったこの一基だけからも，他の全ての文化財が貴重な文化財であるということを物語っています。こうした貴重な文化財が一基でも破壊される危険性があれば何らかの形で保存に努めることこそが私達現代人の役目ではないかと思うのです。現状のままで保存出来れば最良の方法ですが，発掘調査による記録保存の方法も，技術的な面で時代的制約を受ざるを得ないが，現代人の文化財保護に対する努力と誠意を表現する現代的方法としてこれも意味のあることでありましょう。この報告書の刊行が，今後の研究の参考となり，文化財保護意識をさらに高めるための糧ともなれば幸いであります。

今回の発掘調査及び本報告書の刊行に並々ならぬご尽力を賜わった中島勝国氏を始め調査員の方々や発掘作業に参加された方々，そして文化財の保護に深いご理解とご協力をいただいた不二企業株式会社に対し深く感謝の意を表します。

昭和49年2月

可児町教育委員会教育長
只　腰　左　門

柿下古窯発掘調査団

発掘責任者	可児町教育委員会教育長	只腰左門
県文化課		波多野寿勝
調査主任	岐阜県考古学会会員	中島勝国
調査員	〃	古川庄作
〃	〃	田口昭二
〃	〃	稲垣雄之助
〃	〃	上野晃司
〃	可児町文化財審議員	続木正
町文化係	可児町教育委員会	田口茂
協力者	吉田喜彦・今井静夫・桃井勝	
作業員	大杉一郎・高橋和久・大平一・鈴木照男	
	宮坂博司・綾木義郎・柳生誠・鈴木醒悟	
	大森寿子・可児貞子・飯田真理子	

目　　次

序
まえがき
1　調査の契機と経過……5
2　柿下古窯の位置と環境……6
3　窯の構造……8
4　出土遺物……12
5　まとめ……17

挿図目次

挿図一　柿下古窯付近地形図……6
挿図二　可児町古窯(灰釉陶・山茶碗期)分布図……7
挿図三　柿下古窯地形図……10
挿図四　柿下古窯実測図……11
挿図五　出土遺物実測図(碗・大碗)……13
挿図六　出土遺物実測図(小碗・片口碗・壺・皿・印花)……15

図版目次

図版1　古窯址遠景・古窯址近景
図版2　窯体近景・分焔柱近景・遺物出土状況・窯壁修復状況
図版3　碗・小碗・片口碗
図版4　皿・皿底部の撫で指圧痕・印花のある皿
図版5　壺・陶丸・色見・焼台
図版6　碗の重ね焼成・焼台上の焼成・碗と皿の重ね・碗のかぶせ・皿の重ね

ま　え　が　き

1．本報告書は，岐阜県可児郡可児町柿下３の１の１番地に所在する柿下古窯についてのものである。

2．本古窯の発掘調査は，昭和48年３月４日より同年３月31日にわたっておこなった。

3．発掘調査の主催者は，可児町教育委員会であり，本調査の担当は，中島勝国ら６名でおこなった。

4．熱残留磁気測定は，大阪大学基礎工学部川井研究室に調査を依頼した。

5．出土品は，可児町教育委員会で保存する。

6．報告書の作成は，主として中島がおこなった。

1．調査の契機と経過

柿下古窯が調査にいたる経緯は，昭和48年1月6日に町教委の依頼をうけて町文化財審議員の有志が，不二企業KKの宅地造成第二期工事区域内の埋蔵文化財の有無についての予備調査をしたところ古窯址が発見されたので，町教委に報告した。町教委は，早速，不二企業KKに対し現状保存を要請した。それを受けて不二企業KKは，その保存対策を緊急に立案され町教委に提示されたが，古窯址だけが高く残されることがわかったので，その周辺の地層（砂礫層）上から考えても不可能と判断し発掘調査をし記録保存することとなった。なお，その間には，県教委文化課の指導を受けた。

発掘調査は，昭和48年3月4日から，昭和48年3月31日までの25日間おこなわれた。

3月4日 (日)　晴

現地で作業手順などを検討したのち町教委にて，調査員・町教委との打合せをする。

3月5日 (月)　晴のちしぐれ

雑木の伐採・下草刈りをする。

3月6日 (火)　晴

下草刈りなどを続行するとともに，調査区域の観察をし，試掘溝の掘さくを始める。

3月7日 (水)　晴

試掘溝より窯壁の一部を検出，自然釉が付着していてビードロ状となっていた。

3月8日 (木)　晴

窯壁の輪郭を追跡する。天井部は剝落し陥没していると思われる。

3月9日 (金)　晴のちしぐれ

窯体内の掘り下げをおこなう。分焔柱を確認する。

3月10日 (土)　晴のち曇

窯床面の検出，焼台・山茶碗の破片や焼台にのせられたままの山茶碗も検出された。

灰原に地層観測用畦を残して発掘開始，窯体より東へ7mほどに長さ8m(南北に)ほどの凹地を発掘にかかったが，粘土と碗の破片などが検出された。

3月11日 (日)　晴

燃焼室付近の床面を検出するとともに灰原の発掘を進める。

3月13日 (火)　晴

窯内の清掃をするとともに，前庭部の検出をする。灰原の発掘を続行。

3月14日 (水)　晴

窯体の実測作業にとりかかる。灰原の発掘続行。灰原より陶丸を検出する。

3月15日 (木)　晴

窯体の断面を実測する。灰原の発掘続行。片口碗を検出する。

3月16日 (金)　晴

灰原の発掘続行，窯体を中心に平面図作成。

3月17日 (土)　晴

灰原の土層観察をしたのち，観察畦をとりはずす。窯床面の縦・横断の観察をする。

3月19日 (月)　晴

現地での発掘調査は一応磁気測定残し終了。

3月20日～29日　出土品の水洗いをする。

3月31日 (土)　曇のち小雨

阪大・川井研究室室員によって残留磁気測定の資料どりを実施する。

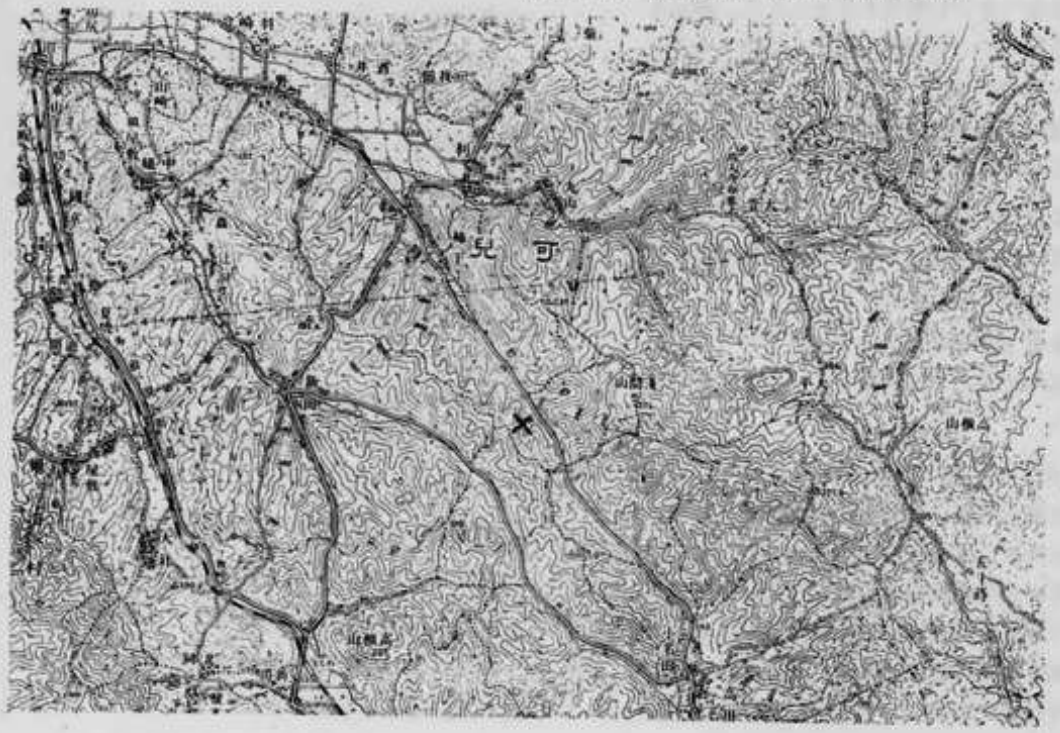
2．柿下古窯の位置と環境

柿下古窯は，岐阜県可児郡可児町柿下３の１の１番地に所在する。可児町は，岐阜市の東方約30kmのところに位置し，東は，同郡御嵩町と，南は，多治見市・土岐市の両市と，北は，美濃加茂市と，西は，愛知県犬山市と接している。

可児町は，北に向って開いている盆地状（太田盆地）の地形で，その底が木曽川や可児川が開折し段丘の平担部と，その周囲の丘陵部（美濃高原の西端にあたる）とに大別される。この丘陵こそ，瀬戸層群の粘土層の上に土岐砂礫層がおおっているわけであるが，この粘土層が陶土を含んでいる地層で，多治見・土岐・瑞浪・瀬戸と古くから陶器の生産が行なわれた地域へとつながっている丘陵である。この粘土層は，可児地域では土岐地域ほど発達せず，点在しているが，柿下古窯付近の浅間山周辺にはかなり発達しているという。(注1)

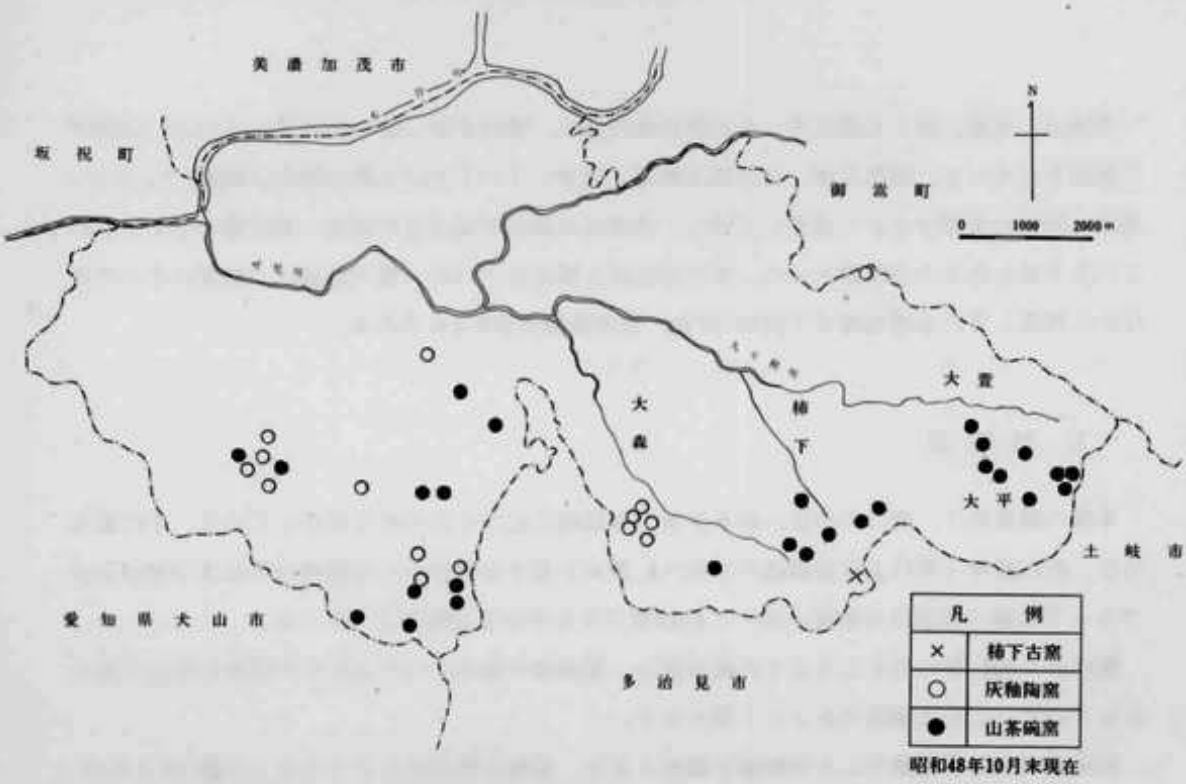
近年，可児町周辺の丘陵地は，ゴルフ場・住宅団地・工業団地へと変貌しつつあるなかで，昭和30年代の工事は全く埋蔵文化財に対しての配慮が足りず数多くの古窯址などが調査されずに破壊されていったのは残念である。

挿図一　柿下古窯址付近地形図　（周辺が開発されているからあえて古い地図を使用したので地名など右読みである）



×印…柿下古窯

挿図二　可児町古窯(灰釉陶・山茶碗)分布図



可児町には，平安期から鎌倉期の灰釉陶器の古窯址が点在し，鎌倉期から室町期の山茶碗の古窯址になるとその数が多くなる。(注2) 日本の窯業の一大転換となった，かの安土・桃山陶は，久々利の大萱・大平から土岐の久尻にかけてに住んでいた陶工らの手によって，志野・織部の名品が焼かれたことである。これらの大萱・大平は江戸時代末まで作陶されていた，一時中断されたが，国の重要無形文化財の荒川豊蔵氏の開窯とともに，現在は幾多の陶芸家の方々が築窯し作陶されている。

柿下地区は，旧久々利村の一部で，久々利川の支流である柿下川に沿って細長く段丘が発達し，そこに水田と集落があり，周りの丘陵は，東は大萱・大平と，南は，多治見市小名田へと地続きである。

今回，調査した古窯址は，柿下川の最上流での一支谷の南面する傾斜面の峰よりやや下ったところに築窯している。近くにも，以前の工事のため消滅した山茶碗古窯址が存在したという。また同じ丘陵側に，2基の山茶碗窯址が確認されている。

なお，柿下地区は，久々利銅鐸の出土地でもあり，古墳や横穴墓群も存在している。

注1．地質調査所報告，第 232号「岐阜県御嵩地区の地質とウランの産状」坂巻幸雄他
注2．町教委，昭和48年10月30日現在の確認数。灰釉窯15か所・山茶碗窯27か所。

3．窯の構造

本窯は，東南に続く小渓にそった丘陵の南斜面に，焚口を東（南へ35度ずれている）に向けて築窯されている。廃窯以後，天井部は剝落し陥没している上に土砂が窯内に堆積していたが，窯床・側壁の大部分がよく遺存していて，窯道具の焼台が焼成室の床面に原位置のまま残されていると思われるのが34箇あった。また分焔柱も残されていた。窯の全長は，窯床にそって焚口から残存している煙道端まで約16.37m，焼成室最大巾2.2mである。

(1) 燃焼室

本窯の燃焼室は，焚口の巾は，約0.9m・分焔柱に近づくにつれて広がっていて，その最大巾は，約1.25m（焚口より分焔柱の方向へ1.27m）長さは焚口から分焔柱の中心まで約2.25mであって床面の傾斜は分焔柱に向って約10度でゆるやかな勾配で上っている。

焚口から約1.10mのところまでの両窯壁は，使用後の焼台をつみ上げその間隙を赤土で固められていた。これは補修のあとても思われる。

燃焼室の床面を縦割りしその断面を観察すると，遺物を敷詰めたようになった層(厚さ8cm)の下に灰層が3cmほどあってその下は，赤褐色層となって地山層の焼土層となっていた。この遺物層は，恐らく廃窯した時に完全に窯出しせずに放置されていたものが落ち込んだものと思われる。なお検出された遺物は，碗・皿の破片ばかりであった。

分焔柱は，残存している部分の高さは，中心で約71cmで，ほぼ円形で直径が約60cmであって，窯壁との間隙は，焼成室に向って右側へ65cm・左側へ55cmであった。分焔柱は，焚口付近の窯壁と同じように使用後の焼台をつみ上げ，その間隙を赤土で固めて作られ，焼成室側の表面は熔融化していた。

(2) 焼成室

分焔柱の中心から煙道部の境までの窯床にそった長さは，約10.5mで，巾は分焔柱の中心より奥へ1mのところで1.65m(挿図三の断面図E～E′)，同じく4mのところで1.57m（挿図三の断面図F～F′）である。窯床の傾斜は，約27度でゆるやかに上っていっている。

両窯壁は，美しい硝子釉面で鐘乳石状に熔着していた。北壁の分焔柱の中心より2.5mほどのところに粘土をはりつけて修復したのか指なで跡があった。

窯床の断面の層序は，挿図三でもわかるように，上から黄色土層・橙色土層・えんじ色土層・焦げ茶色土層と続いて地山層となっていた。全く同じ床面の上に再び重ねて窯床がはりつけていると思われる。窯床の横断面を観察すると，窯壁はもとのものを削り落して修復していると思われた。窯壁全体を修復した際のものか灰原からかなりの量の熔着し硝子状に硬化した窯壁と思われるものが廃棄してあった。

また窯床には，前述のように最後の焼成時の焼台が上部に残されていて，窯壁付近には，焼台にそのまま山茶碗が置かれていたのが3個あった。焼台の間隙は，上下・左右とも平均値は8㎝で，それを基準にしての焼成条件を考えると，焼台の総数は，170～180である。なお，焼台に残置されていた山茶碗は，すべて窯壁に近いところのもので，焼きが悪く生焼けの状態のものであった。

(3) 煙道部

焼成室の境からのど首状となっていて，一担巾は，約80㎝となり再び広がり最大巾約1.13mとなって次第に細くなっていっている。煙道部の長さは，約3.62mであった。焼成室の窯壁がよく焼け，硝子釉面となっていたが，煙道部はその遺存状態が悪く，煙出しは全く遺存してない。

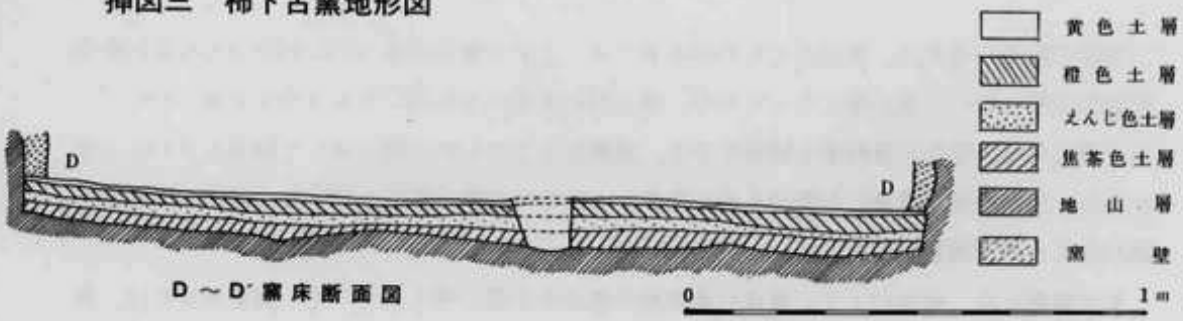
(4) 灰　原

灰原は，窯体の下方の傾斜度25～26度の傾斜面に，最大長16.4m・最大巾11mの扇状となっている。遺物は，黄土層の上に黒褐色土層の中に包含されていて最も厚い所で0.4mであってその上に0.1mほどの表土層が堆積していた。しかし，盗掘と，松木堀り（植木屋が庭木用に採集していったと思われる）のために数ヶ所堀り起されていた。

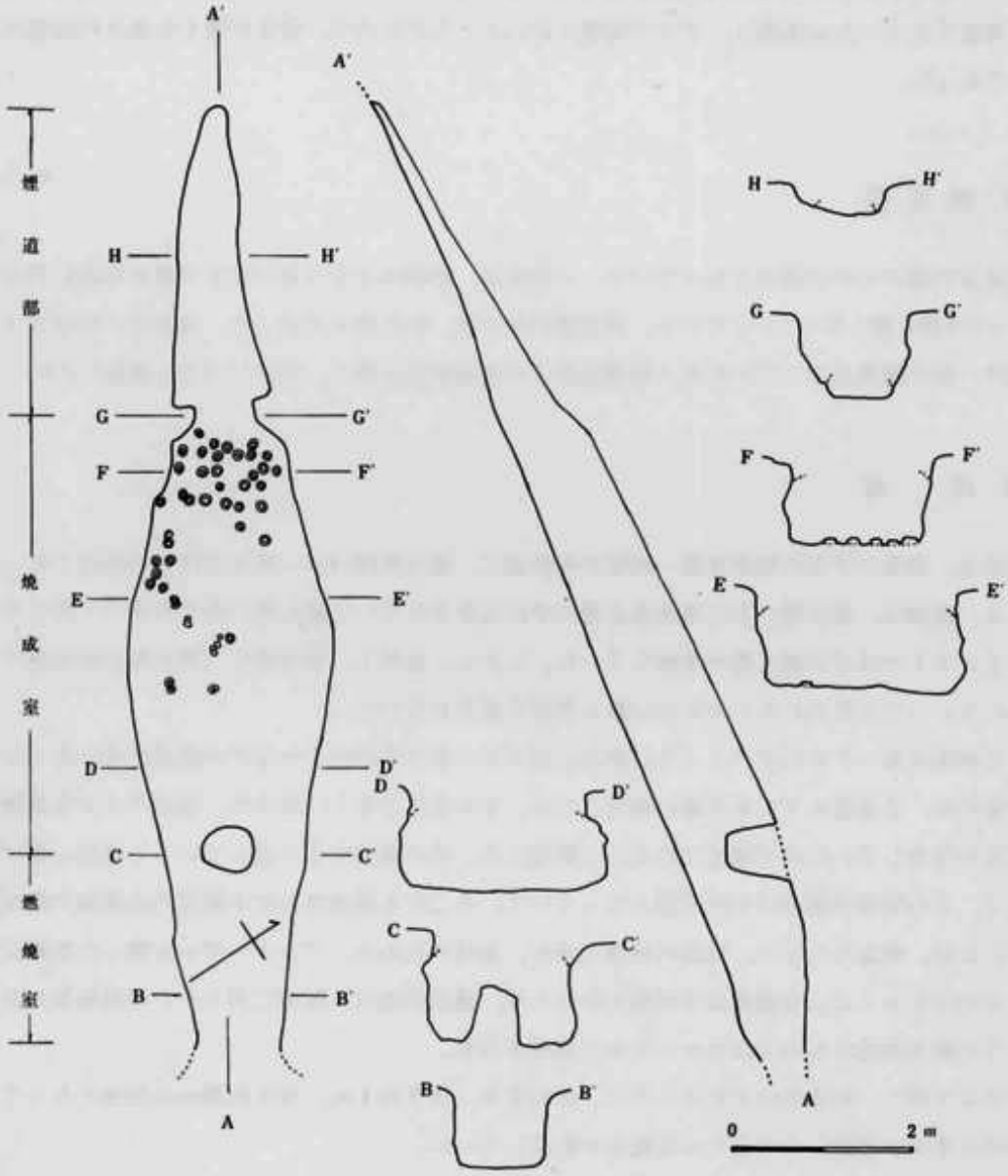
また窯体の東へ7mほどのところに南北に約8mの長さで巾約1mほどの溝状凹地があったので始めは，2基並んでいると思い調査したが，土が焼けてなく，粘土や，焼成不十分な遺物や破片が包含していたので窯址ではないと断定した。その溝状を上へ追っていくと尾根に延びていて，その尾根の部分はやや平担となっていて，そこにも焼成された小破片の山茶碗が散在していたが，残念なことに，以前の林道工事か，集材のためか，ブルトーザーが削った形跡があったのでじゅうぶんな調査は不可能であったが，溝状凹地は，尾根に何らかの付属施設があってその排水路的なものではなかったかと推察される。

焚口より西へ，約5mほどのところに，巾約2m，長さ約4m，深さ約30㎝の凹地があってその中に赤土が堆積しその近くには焼台が散乱していた。

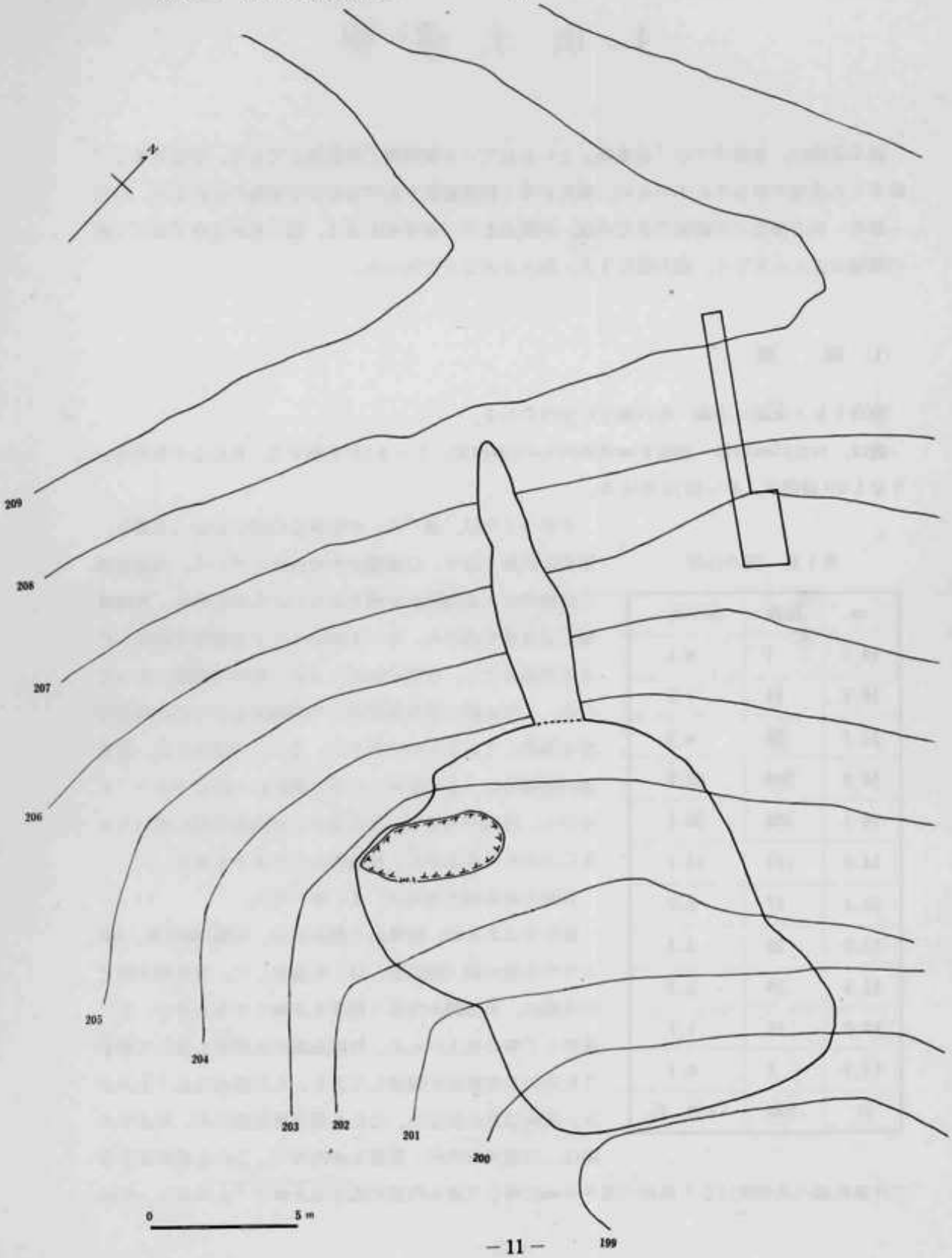
挿図三　柿下古窯地形図



D～D′窯床断面図



挿図四　柿下古窯実測図



4．出　土　遺　物

出土遺物は，当地方では「山茶碗」といわれている陶器類と窯道具とである。灰原を中心に数多くの遺物が検出されているが，破片が多く個体総数をあげるのは不可能ではあるが，口径・器高・高台径などが測定できたのは，碗類832点・皿類611点で，碗・皿が主体であって他の器物はほとんどなく，壺の破片1点・陶丸4点などであった。

(1) 碗　　類

類別すると大碗・小碗・片口碗とに分けられる。

碗は，口径15cm内外・器高5cm内外のもの(挿図五，1～5)が大部分で，それよりやや小ぶりなもの(挿図五，6～10)とがある。

第1表　碗の口径

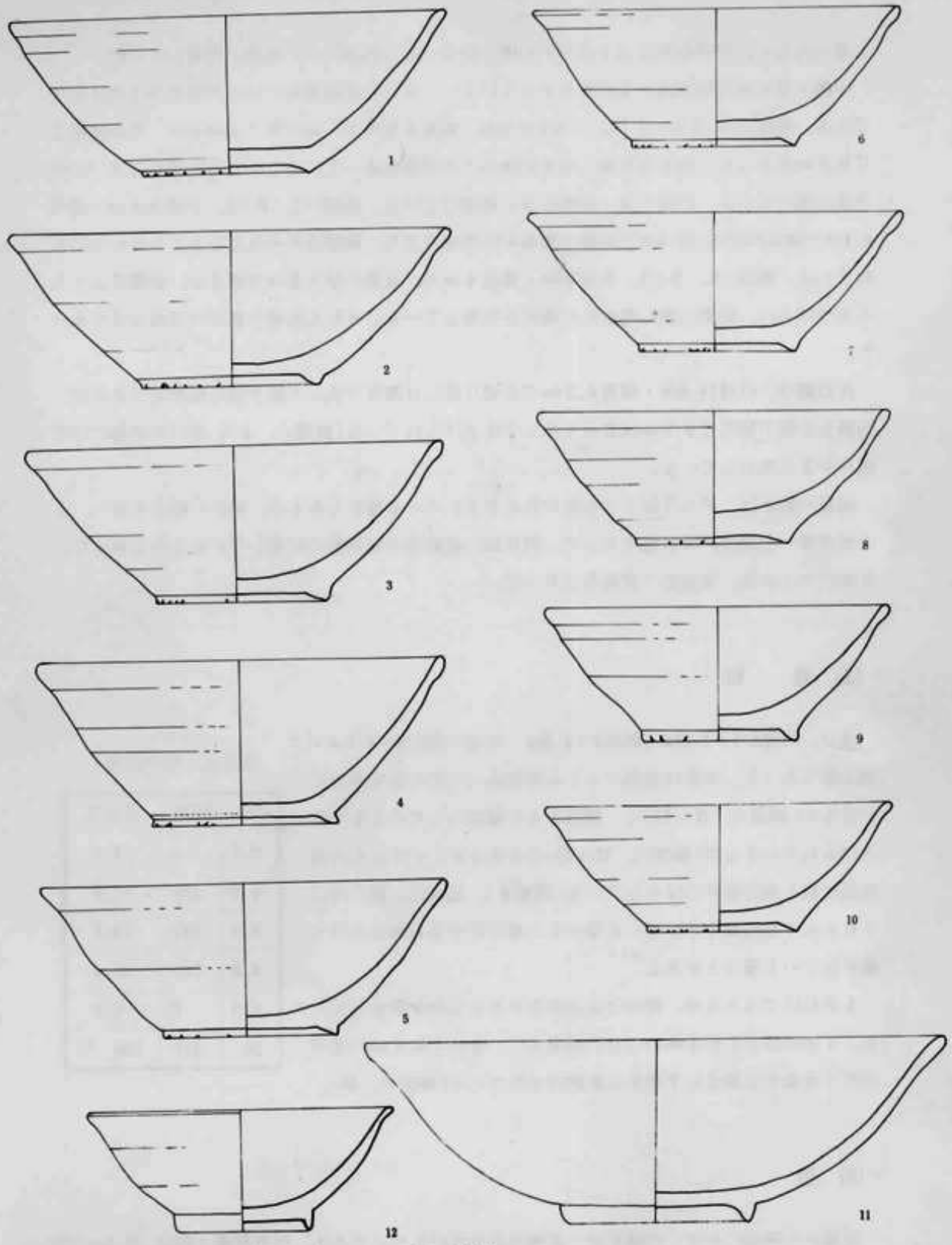
cm	個数	百分比
16.5	1	0.1
16.0	14	1.7
15.5	36	4.3
15.0	243	29.3
14.5	300	36.1
14.0	151	18.1
13.5	17	2.0
13.0	36	4.3
12.5	19	2.3
12.0	14	1.7
11.5	1	0.1
計	832	100　%

そのつくりは，逆「八」の字状に口辺にむかって開き，胴部が気持ちはり，口縁部がやや外反していて，内面底部には撫でによる指圧痕が残されているものもある。外面底部には糸切りののち，3～4mmのより土を指圧で貼付してある付高台とし，内部が斜めとなる三角形の断面となっている。これは碗と高台接着部との剥離防止のために高台内側を強化しているためであろう。またこの高台には，成形後の乾燥時に「もみがら」の上に置かれた際にできた「もみがら」圧痕があるし，またなかには内面底部に重ねたときにできた「もみがら」圧痕のみられるのもある。

口径と高台径との比は，5：3である。

破片ではあるが，特殊品と思われる。大碗(挿図五，10)とやや小型の碗（挿図五，11）を検出した。復元推定値だが大碗は，口径20cm内外・器高6.2cmとやや大きく，また成形も丁寧に仕上げられ，外面底部の糸切痕も消して整形されたのち付高台が貼付してある。その高台にも「もみがら」圧痕は見られない。これも復元推定値だが，小ぶりの碗は，口径10cm内外・器高4cm内外で，これも成形は丁寧で外面底部の糸切痕はなく高台の高さ6mmに対して高台内部の高さは3mmで「もみがら」圧痕

挿図五　出土遺物実測図(碗・大碗)



1～10　碗　11　特殊品大碗　12　特殊品小型碗

も見られなく，碗の胴部にふくらみがつけられている。内面には，砂塵が熔着していた。

小碗と思われる特殊品が3点検出されている。いずれも東濃地域ではこの種の出土例はまだである。挿図(六，1)のように，口径10.7cm・器高4.9cmで，底は厚く2cmあり，外面底部より0.8cmのところに深さ0.5cm・巾0.7cmほどの凹帯があって，そこからゆるやかに逆「八」の字状に開いている。内面には，砂塵が多く熔着していた。挿図(六，2)は，口径9.8cm・器高4.4cmで底部の厚みは0.8cmで外面は腰部がやや切り立ち，胴部はややまるくふくらみがつけられている。挿図(六，3)は，口径9cm・器高4cmで，底部の厚み2cmであるが，胴部にふくらみがつけられ，底部に重ね焼かれた破片が付着している。それも糸切り底だけで高台はなかった。

片口碗は，口径14.4cm・器高6.2cmで糸切り底に付高台であって碗と同じ成形法であるが，内側から軽く指圧で0.5cmほどせり出して仕上げられている(挿図六，4)。他に片口部だけの破片が2点検出している。

碗類の胎土は，すべて同じで小粒の石が含まれている場合もあるが，細かい粘土を用い，その焼成後の色調は，灰白色であって，内外面に淡緑色の自然釉の付着しているものもあった。生焼けのものは，黄白色・黄褐色であった。

(2) 皿　類

皿は，口径9.5～7.5cm・器高2～1.5cm・糸切り径6.3～4.1cmの測定値であった。成形は胴部にふくらみがあってやや外反させているもの(挿図六，6～11)と，腰部から口縁部へとややまるく仕上げられているもの(挿図六，12～15)とがあるが，いずれも内面底部に軽く指圧痕がつけられている(図版4)。焼成は，碗の内に入れられて重ね焼きされている場合と，皿だけを重ね積みあげて焼かれている場合とがある。(註1)

1点だけではあるが，押印による印花のあるものが検出している。1弁の長さが約3mmの八弁の刺突文で，全体で約8mmの径の印花で現存する部分に不規則に6箇印されている(挿図六，16)。

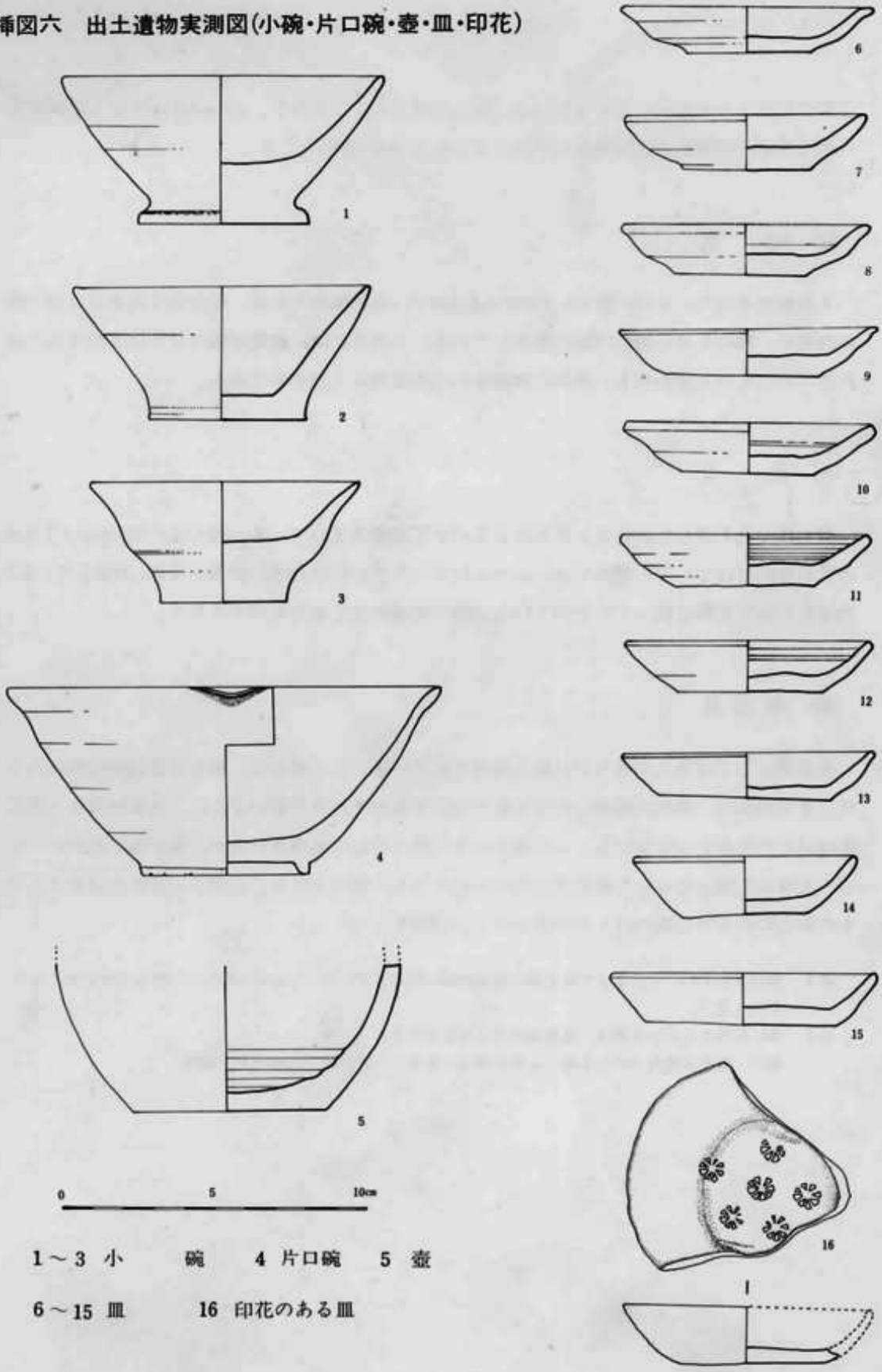
第2表　皿の口径

cm	個数	百分比
9.5	2	0.3
9.0	109	17.8
8.5	312	51.2
8.0	186	30.4
7.5	2	0.3
計	611	100　%

(3) 壺

底部から胴部にかけての破片が一点検出されているのみである。外面底部の径は，6.3cmでゆ

挿図六　出土遺物実測図(小碗・片口碗・壺・皿・印花)



1～3 小　　碗　　4 片口碗　　5 壺

6～15 皿　　16 印花のある皿

るやかなまるみをもってあがっている。胎土は碗と同じであるが，小石は混ってなく色調は灰白色で外面に淡緑色の自然釉が二すじほどたれている(挿図六，5)。

(4) 陶　丸

4点検出されているが，直径2.6cmから2.1cmで，ほぼ球形である。4点のうち2点は同一碗の内面に，他の1点も碗の内面に熔着している。このことは，焼成が碗のなかに入れておこなわれていたものと思われる。単独に検出されたのは残る1点のみである。

(5) 色　見

碗の底に孔を穿たたれ色見と思われるものが三点検出されている。碗の底に径3cmから1.5cmの孔が穿たたれていて，窯内では，ふせられていたのか碗の外面に砂塵が全面に付着している。色見といっても釉を使っていたのではないので焼成具合を見たものであろう。

(6) 窯道具

窯道具としては馬爪型焼台が百数点検出されている。この焼台は，粘土を径12cm内外の大きさにまるめられ，窯床の傾斜に合せて張りつけて碗がすわりやすいように，径8cm内外・深さ2cmほどの凹みをつけている。この焼台の上に積み重ねて焼成されるが，最上部に碗がかぶせられた場合もあったらしく碗が重ね合せられたままに検出された。しかし，それらはどうしたものか上にかぶせた碗のほうがやや小さい。(図版6)

注1．最高9枚重ねにしたままで最上部の皿は砂塵が熔着していることからも皿のみの重ね焼きがおこなわれたと思う。

注2．皿に印花されている例は，東濃地域では初見である。
瀬戸・瓶刈古窯出土の山茶碗に同類の押印がある――若杉敬「古瀬戸考」1973

5．まとめ

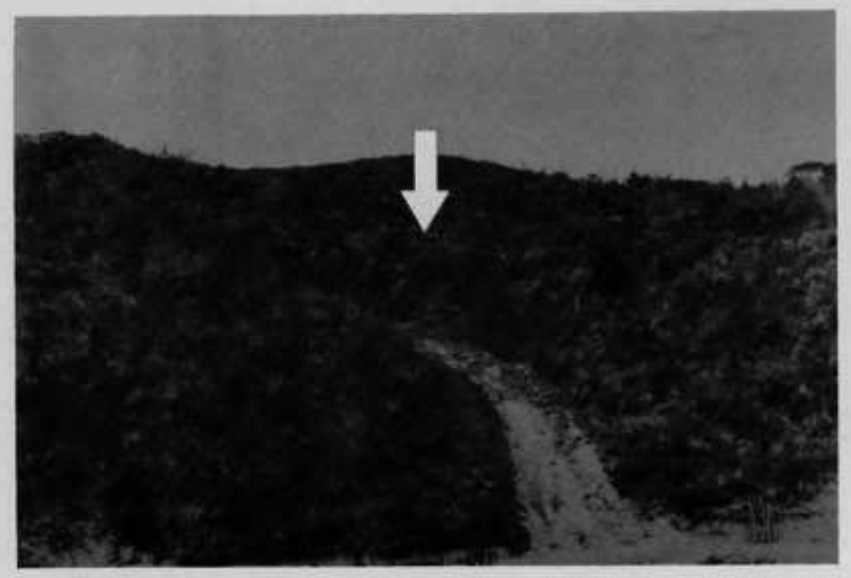
本古窯は，中世陶器に属する山茶碗のものであって，先に可児町教委によって調査された谷迫間古窯の灰釉陶期の窯より[注1]幾分大きくて，全長16.37m，巾2.2mであった。またその立地も，小支谷の南面する傾斜地にあって当地方の山茶碗窯と同様である。

遺物は，碗・皿が大部分であって他は数点あるのみである。しかし，そのなかで挿図六－1～3のような小碗の出土例はかつて無く，その使用がなんのためのものであるのか不明である。また挿図六－16の印花や挿図五－10．11のように特に丁寧に製陶されたものも含まれていることが，一つの窯で，粗製のものと精製したものとがあることを語っていると思う。

出土遺物の碗の形態や，小皿の形態・内面底部の撫で指圧痕などから推定し，窯洞1号窯期から白土原1号窯期にかけての時期に入るものと思われる。従って鎌倉時代末期から室町時代初期にかけてのつまり西暦14世紀の四半期の第2期に入るものと思われる。[注2]熱残留磁気測定では，編角（D＝4.5°）・伏角（±＝55.2°）・誤差角（α95＝1.3°）で推定年代は，1.350年±30年という結果を得ている。[注3]これは当地方の山茶碗の編年とほぼ一致している。

注1．谷迫間古窯は，長さ約6.7m，巾約1.35mであった。
（大江令「谷迫間古窯址発掘調査報告書」可児町教委 1974）
注2．田口昭二「美濃古窯の灰釉陶器と山茶碗の編年」1973年
注3．大阪大学基礎工学部川井研究室によって測定。

図　　版



遺跡遠景（東南方向より）

遺跡近景（東南方向より）

窯体近景（煙道部上より見た）

焼成室上端遺物出土状況

燃焼室遺物出土状況

分焔柱近景（焼台の利用状況）

焼成室窯壁修復状況

碗

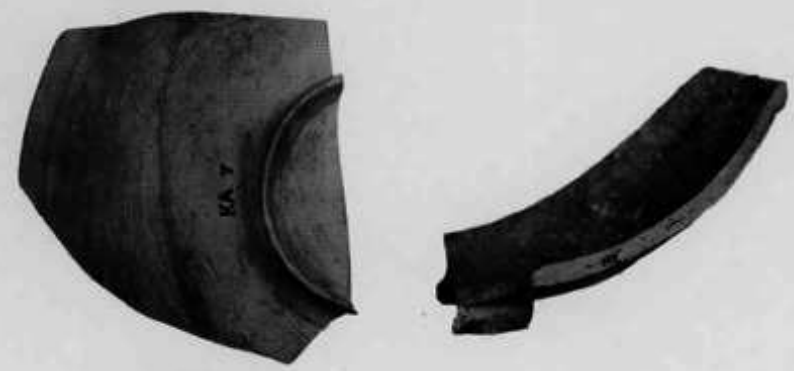
碗

小　碗

小　碗

小　碗

片口碗



特殊品大碗

特殊品小型碗

皿

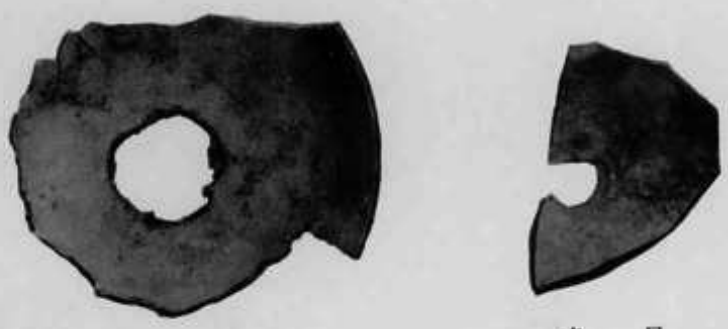
皿　糸切り底

皿底部の撫で指圧痕

印花のある皿

鍋

陶　丸



色　見

焼　台

碗の重ね焼成

焼台上の碗の焼成

碗と皿の重ね焼成

碗焼成のかぶせ

皿の重ね焼成